

電卓は子供の算数教育にどう寄与するか？

私は、物心付くや否や、自他共に認める理系であったが、物事の理解には時間のかかる方だった。 どう関連するのか、算数の計算問題もいつも時間が足りず、それが後に数学の苦手意識の元になったように思う。

小学生の時分、学校の夏休みに鹿児島島の母の実家に帰省すると、道路一本隔てた本家が焼酎の造り酒屋を営んでおり、田舎の工場とて、さほど危ないものがある訳でもないの、子供には格好の遊び場だった。 事務所で帳簿をつけていた青年に、「志郎ちゃん、宿題は済んだね？」と訊かれ、単調な計算問題が大分残っていることをこぼした。 すると、脇の黒い機械を指し示し、「こん機械で計算すれば、一気(直ぐ)じゃっど。」と言いながら、例題をやって見せてくれた。 そうか、世の中にはこんな便利なものがあるのか。 シメタ、とばかりに機械の操作を覚えてしまい、宿題帳を持ち込むと、一気呵成に仕上げってしまったものだ。(日記帳によれば、それは小学校 5年のときのこと。 骨董機械の動態保存を趣味にする今、機械は正しく「タイガー計算機」であったと言える。)

どうやら、そのことは母に露見したらしい。「先生に言うてやろ。」と子供をからかっていた青年のこと、面白半分にしたのに違いない。) 叱られた記憶はないけれど、母は父に言いつけた。 大学で教鞭をとっていた父曰く、「計算なんてものは、いずれ全て機械がやるようになるから、それで差し支えない。」。 母は、随分、拍子抜けしたのだそう。

電卓が一気に家庭へ普及したのは 1970年代のこと。 恐らく、どこの家でも宿題を電卓でやって良いものかどうか、同じ議論が繰り返されたに違いない。 それで、電卓の出現は子供の計算能力にどう影響したのだろうか？ 弊害だけでなく、寄与することは何かないのだろうか？

弊害だけを言うのは、算数教育の仕組みが世の中の進歩に追いついていないだけのこと。 電卓の強力なパワーの有難味が実感できるような、電卓がなければ確かめてみようという気力も起きないような、面倒な課題を与えれば良いのだ。 では、その問題とは？ 言うは易く行なうは難し。

(初出 Jul. 3, 2008)